腎細胞癌顎下腺転移の2例

近藤 敦¹⁾・小澤 貴行²⁾・石川 忠孝³⁾・若島 純一⁴⁾Two Cases of Metastatic Renal Cell Carcinoma
to the Submandibular Gland

Atsushi Kondo

(KKR Sapporo Medical Center)

Takayuki Kozawa

(Obihiro Kosei General Hospital)

Tadataka Ishikawa

(Ishikawa ENT Clinic)

Junichi Wakashima

(Tomakomai ENT Clinic)

Renal cell carcinoma can metastasize to any part of the body. We encountered two cases of renal cell carcinoma that metastasized to the submandibular gland.

The first case was a 74-year-old man and the second case was a 78-year-old man. Each patient complained of a painless swelling of the right submandibular gland after nephrectomy for renal cell carcinoma. In both cases, we performed resection of the submandibular gland. Pathological examination demonstrated metastatic renal cell carcinoma to the submandibular gland. Metastatic renal cell carcinoma as a submandibular gland tumor is rare, and we discussed metastasis of renal cell carcinoma especially to the submandibular gland.

Key words : metastasis, renal cell carcinoma, submandibular gland

はじめに

腎細胞癌は血流が豊富なため全身のあらゆる臓器に転移をきたすことが知られており、頭頸部領域への転移は4～10.7%と報告されているが顎下腺への転移はまれとされる。今回われわれは腎細胞癌手術後に顎下腺に転移をきたした症例を2例経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例

症例1：74歳，男性。

主訴：右顎下部腫脹。

現病歴：平成13年8月他院泌尿器科で左腎細胞癌にて左腎摘出術，平成15年10月右腎細胞癌にて右腎摘出術を施行された。病理診断はいずれも腎淡明細胞癌であった。さらに平成17年5月右副腎腫瘍にて右副腎摘出術施行，病理は腎細胞癌の転移であった。平成16年2月より右顎下部腫脹を自覚していたが放置していた。徐々に増大傾向にあるため前医にて超音波検査を施行したところ右顎下腺に腫瘤を認めたため，平成17年2月9日帯広厚生病院耳鼻咽喉科に紹介となった。

1) KKR札幌医療センター耳鼻咽喉科

3) いしかわ耳鼻咽喉科クリニック（帯広市）

2) 帯広厚生病院耳鼻咽喉科

4) 苫小牧耳鼻咽喉科クリニック（苫小牧市）

図1 症例1 造影 CT 所見
右顎下部に均一に造影される円形の腫瘍を認める。

家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：特記すべきことなし。

現症：初診時右顎下部に13×10 mmの弾性硬、可動性良好な無痛性腫瘍を認めた。頸部造影 CT にて右顎下部に辺縁整、均一に造影される円形の腫瘍性病変を認めた(図1)。頸部超音波検査では右顎下腺内に境界明瞭で後方エコーの増強される充実性の腫瘍を認めた(図2)。穿刺吸引細胞診はclass IIで、明らかな悪性を示す細胞を認めず由来もはっきりせず組織推定は困難であった。ガリウムシンチグラフィーでは右顎下腺を含め全身に異常集

積を認めなかった。腎細胞癌の顎下腺転移の可能性も念頭に入れ、平成17年6月28日全身麻酔下で右顎下腺摘出術を施行した。術中所見では腫瘍は顎下腺内に存在し顎下腺組織との分離はできなかった。その他の周辺組織への癒着はなかった。手術は腫瘍を含めた顎下腺の摘出のみで、顎下部の郭清は施行しなかった。摘出物は肉眼的には顎下腺内に長径15 mmの黄色結節性の腫瘍を認めた。また病理組織学的には腎淡明細胞癌の転移との診断であった(図3)。術後経過観察中であるが現在のところ

図2 症例1 超音波所見
右顎下腺内に境界明瞭な充実性の腫瘍を認める。

図3 症例1 摘出物病理組織所見 (HE 染色像, ×100)
淡明胞体を有する腫瘍細胞が胞巣状に増殖する腎淡明細胞癌の転移像。

図4 症例2単純CT所見
右顎下部に円形の腫瘍を認める。

再発を認めていない。

症例2: 78歳, 男性。

主訴: 右顎下部腫脹。

現病歴: 平成15年1月当院泌尿器科で左腎淡明細胞癌にて左腎部分切除術を施行された。平成16年9月より右顎下部の腫脹を自覚, 他院耳鼻咽喉科受診し右顎下腺腫瘍の診断にて経過観察されていたが, 腫瘍が徐々に増大傾向にあるため平成17年7月27日帯広厚生病院耳鼻咽喉科に紹介となった。

家族歴: 特記すべきことなし。

既往歴: 特記すべきことなし。

現症: 初診時右顎下部に直径20mmの弾性硬, 可動性良好な無痛性腫瘍を認めた。頸部単純CTで右顎下部に辺縁整, 境界明瞭な円形の腫瘍を認めた(図4)。頸部超音波検査では右顎下腺内に24×17mmの内部やや不均一でほぼ境界明瞭な腫瘍を認めた(図5)。穿刺吸引細胞診ではclass IVで核異型を伴う細胞を認め, 断定はできないが腎細胞癌の印象が強い細胞像との結果であった。腎細胞癌の顎下腺転移を疑い平成17年8月23日全身麻酔下で右顎下腺摘出術を施行した。術中所見は腫瘍は周囲の組織との癒着は認めなかった。手術は腫瘍を含めた顎下腺の摘出のみで, 顎下部の郭清は施行しなかった。摘出物は肉眼的には顎下腺内に長径18mmの結節性腫瘍を認め剖面は黄色であった(図6)。また病理組織学的には類円形核と淡明胞体を有する腫瘍細胞が豊富な血管性間

図5 症例2超音波所見
右顎下腺内に内部やや不均一な性腫瘍を認める。

質を伴って胞巣状増殖しており腎淡明細胞癌の顎下腺転移との診断であった(図7)。術後インターフェロン療法目的で当院泌尿器科に転科となった。

考 察

腎細胞癌は血流が非常に豊富な腫瘍であり, 血行性に全身のあらゆる臓器に遠隔転移をきたすとされている。その転移部位の頻度として, Saitoh¹⁾は1451例の腎細胞癌剖検例を検討し, 肺(79%), リンパ節(66%), 骨(42%), 肝(41%)が多いと報告している。頭頸部への転移

図 6 症例 2 摘出物標本

顎下腺内に結節性の腫瘍を認め剖面は黄色だった。

図 7 症例 2 摘出物病理組織所見 (HE 染色像, ×100)

類円形核と淡明胞体を有する腫瘍細胞が豊富な血管性間質を伴って胞巣状に増殖しており腎淡明細胞癌の顎下腺転移との診断。

の頻度は 4 ~ 10.7%^{2) ~ 4)} と報告されており, 犬飼ら⁵⁾ の報告によると頭頸部への転移部位の頻度は鼻副鼻腔, 甲状腺, 下顎骨, 耳下腺の順に多いとされている。本邦における顎下腺転移の症例はわれわれが渉猟しえた範囲では過去に 6 例^{6) ~ 11)} のみでありきわめてまれと考えられる。顎下腺を含めた頭頸部腫瘍症例の診断において, 腎細胞癌の既往のある場合は転移性病変を鑑別として念頭に入れることは重要であると考えられる。

腎細胞癌の遠隔転移は多発性の転移が多いといわれており, 腎細胞癌と診断された時点で 81%に多発性転移, 8%に孤立性転移を認めるという報告¹⁾ があるが, 頭頸部

領域への転移例では孤立性転移が多いとの報告¹²⁾ もある。本邦の過去の顎下腺転移症例においては 6 例中 2 例^{7) 11)} で孤立性転移であり, 残り 4 例は多発性転移であった。多発性転移症例の顎下腺以外の転移部位としては肩甲骨, 肋骨, 脊椎, 大腿などが報告されている。自験例では 1 例が副腎との多発性転移, 1 例が孤立性転移であった。

腎細胞癌の原発巣に対する治療は腎摘出術が第一選択であるが, 術後長期にわたって遠隔転移が出現する可能性がある。腎細胞癌の術後の転移出現率として, 5 年で 38.9%, 10 年で 22.5%との報告¹³⁾ がある。過去の本邦での顎下腺転移症例における顎下腺転移出現までの期間は最短で 2 年, 最長で 12 年であった。遠隔転移はリンパ節転移, 静脈腫瘍塞栓とともに予後を左右する重要な因子であるとされており¹⁴⁾, 遠隔転移病巣に対する対応は重要であると考えられる。

転移病巣に対する治療方法としては外科的切除が第一選択とされており, ほかに保存的治療法として放射線治療, 化学療法, インターフェロン療法などが行われているがいずれも補助治療の域を出ていない。

外科的切除の適応に関しては現在のところ統一した見解は得られていない。野口ら¹⁵⁾ は転移性腎細胞癌の治療について検討し, 転移巣に対する手術施行群は完全切除できた場合手術非施行群と比較して非常に予後良好であったと報告している。また転移を繰り返した症例に対して数度の手術を行い経過良好であった報告^{6) 16)} もある一方で, 転移巣に対する外科的切除術後に早期に再発し予後不良であった症例¹⁷⁾ も報告されている。自験例は 2 例とも全身状態が良好で原発巣の根治治療がされており, 転移病巣の外科的根治切除が可能と判断したため切除術を施行した。顎下腺転移病巣に対する切除術式については, 郭清術を施行した報告^{8) 9)} もあるが, 腎細胞癌の転移様式が血行性転移であることから領域郭清は不要であるとの報告¹⁾ もあり, われわれも 2 例ともに顎下腺摘出術のみとした。

現在のところ転移巣の外科的治療が必ずしも予後を改善するとは言いきれず, 外科的治療の適応は全身状態, 原発巣の治療状況, 転移巣の個数, 部位, 転移巣出現までの期間などから総合的に検討する必要があると思われるが, 選択すべき治療法の一つではあると考えられる。

ま と め

①腎細胞癌の手術後に顎下腺に転移をきたした2例を経験した。

②腎細胞癌の既往のある頭頸部腫瘍症例の診断においては転移性病変の可能性を念頭に置くことが重要であると思われる。

③自験例では2例ともに顎下腺摘出術を施行したが、転移病巣に対する外科的手術の適応は全身状態、原発巣の治癒状況、転移巣の個数、部位、転移巣出現までの期間などから総合的に検討する必要があると考えられた。

なお本論文の要旨は第30回日本頭頸部癌学会（平成18年、大阪）で発表した。

参考文献

- 1) Saitoh H : Distant metastasis of renal adenocarcinoma. *Cancer* 48 : 1487 ~ 1491, 1981.
- 2) 里見佳昭, 松浦謙一, 小川 英, 他 : 腎癌の耳鼻咽喉科領域への転移症例. *臨尿* 28 : 611 ~ 616, 1974.
- 3) Hesan H, Strauss M and Sharkey FE : Urogenital tract carcinoma metastatic to the head and neck. *Laryngoscope* 96 : 1352 ~ 1356, 1986.
- 4) Flocks RH and Boatman DL : Incidence of head and neck metastases from genito-urinary neoplasms. *Laryngoscope* 83 : 1527 ~ 1539, 1973.
- 5) 犬飼賢也, 松沢 真, 長谷川聡, 他 : 頭頸部領域に転移した腎癌の3症例. *耳喉頭頸* 68 : 420 ~ 424, 1996.
- 6) 川原 元, 仲田浄治郎, 金田賢作, 他 : 顎下腺転移を来した腎細胞癌. *臨尿* 50 : 575 ~ 577, 1996.
- 7) 仲 博美, 中村 弦, 海老原秀和, 他 : 腎細胞癌の顎下腺転移症例. *日耳鼻会報* 93 : 994, 1990.
- 8) 真栄田裕行, 古謝静男, 玉城三七夫, 他 : 顎下腺に転移した腎細胞癌の1例. *日耳鼻会報* 103 : 602, 2000.
- 9) 宮島千枝, 浅田 聡, 塩路 豪, 他 : 腎細胞癌顎下腺転移の1症例. *耳喉頭頸* 75 : 716 ~ 719, 2003.
- 10) Kaneko T and Chiba H : Submandibular gland tumor metastatic from renal cell carcinoma. *Hosp Dent Oral-Maxillofac Surg* 14 : 117 ~ 120, 2002.
- 11) 志賀清人, 館田 勝, 西條 茂 : 腎癌の顎下腺転移の1例. *日耳鼻会報* 105 : 713, 2002.
- 12) 薦 佳尚, 井野千代徳, 山下敏夫, 他 : 腎細胞癌の耳下腺転移の1例. *耳鼻* 36 : 7 ~ 10, 1990.
- 13) 高瀬和紀, 野口純男, 窪田吉信, 他 : 腎細胞癌の術後転移に関する因子の検討. *日癌治* 32 : 365 ~ 373, 1997.
- 14) 高土宗久, 坂田孝雄, 中野洋二郎, 他 : 腎細胞癌の臨床病理学的特徴と予後. *日泌尿会誌* 83 : 321 ~ 327, 1992.
- 15) 野口純男, 執印太郎, 高瀬和紀, 他 : 腎癌転移巣に対する手術療法の検討. *J Jpn Soc Cancer Ther* 31 : 5 ~ 13, 1996.
- 16) 吉崎智貴, 野中 聡, 本間 裕, 他 : 頭頸部に転移を繰り返した腎細胞癌例. *耳鼻臨床* 97 : 451 ~ 454, 2004.
- 17) 早川正道, 浅野友彦, 上床典康, 他 : 腎癌浸潤巣, 転移巣に対する積極的な切除療法の臨床結果とその適応について. *西日泌尿* 58 : 997 ~ 1001, 1996.

原稿受付 : 平成18年7月31日

原稿採択 : 平成18年8月24日

別刷請求先 : 近藤 敦

〒062-0931 札幌市豊平区平岸1条6-3-40

KKR札幌医療センター耳鼻咽喉科